

ミモザレター

第5回の発行となる本号は、
臨床研修センター長 松島久雄先生と
臨床研修医 反町真祐子先生から
メッセージをいただきました。



「ミモザのように」

臨床研修センター長 松島久雄

初期研修医として入職する女性医師は、最近3年間では17人、21人、16人と全体の3～4割程度です。国家試験の合格直後である入職時は、知識やスキルを早く身につけて一人前の医師になりたいと思う熱い気持ちが強く出ています。自身の専門性、仕事やプライベートを含む将来の方向性については、2年間の初期研修中に悩みながら決めている研修医が多い印象です。中には人生の大きなイベントである結婚や出産を経験し、研修と家庭や育児を両立させながら奮闘している研修医もいます。努力を経てやっとスタートした医師としてキャリアを継続し、発展させるためのサポートは臨床研修センターの重要な役目であると考えています。



臨床研修センターの責任者である私は女性医師支援センター運営委員会メンバーとして、昨年より支援活動に関わり始めました。支援活動の一つにはハード面の整備があり、既に開設されている院内保育室や病後保育室に加え、新設された高架下ミモザルームが効果的に運用できるよう委員会で話し合っています。その他に院内トイレ、シャワー、診療スペースなどまだまだ介入の余地はたくさんあると思われます。この様にハード面の整備を進める活動は女性医師を支援するためにとっても有益ですが、ハード面よりも重要なのは「職場の理解」に対する整備だと思っています。フルタイムではなく短時間や当直免除で勤務する体制を忙しさのあまり不公平とってしまう医師も一部いるかもしれません。病院という組織の中で医療を継続させるためには、多くの医療スタッフの協力が必要です。さまざまな勤務体制の医師が時短勤務をしてくれることで、病院の機能は維持されます。勤務体制に差があったとしても、その差を不公平と思わずに組織がパワーアップするために必要な体制であると思える職場にすべきなのです。もちろんフルタイムで働く医師の努力を組織がきちんと評価してあげる必要があります。そうすることが時短勤務をしてくれる医師に感謝できる体制構築への近道だと思います。個々の体力、家庭の事情、仕事への情熱などはそれぞれ異なります。個々が求める勤務体制を素直に認めあえる組織づくり、その整備への取り組みが女性医師の支援に繋がっていくと思います。将来的に運営委員会は性別には関係なく、さまざまな医師に対する働き方を支援する組織への発展が求められるのではないのでしょうか。

栃木県に在住の頃、自宅玄関の横にミモザを植えて黄色い花が咲くのを毎年楽しみにしていました。栃木の厳しい天候に負けることなく、大きく成長していくミモザは我が家のシンボルツリーです。このミモザのように埼玉医療センターの女性医師が病院のシンボルとなって輝ける職場になるよう、微力ながら協力していきたいと思っています。

女性医師からのメッセージ



臨床研修医 反町真祐子

研修医2年目の冬、研修医生活も残り数ヶ月を残すのみとなり、私は当院の放射線科に4月から入局することが決まりました。ここ一年は進路の話をすることも多くなりましたが、「働きやすいいい選択だよ、女性なら特に。」といった感想をいただくことが多く、自分の興味から選択した結果なのにと少しモヤモヤした気分になりました。思えば医学部に進学して以来、女性の働き方を意識させられる機会はとても多かったように感じます。就職先や診療科という大きな選択があるためですが、特に女性は生活のことも考えなければいけないというアドバイスは、むしろある種の呪いのようにも聞こえることもありました。

私は医学部に進学する前は工学部で学び、メーカーでの研究職を数年経験しました。女性が少ない環境が多く、身の回りでは例えばある事業所で初めての女性社員の雇用のため、女性用トイレから用意するといったことも決して珍しい話ではありませんでした。本人にも周りにも大きな負担ではありましたが、国のダイバーシティ経営推進の方針もあってか、女性が働き続けられる環境を整備するいい機会でもありました。それと比較すると、医療現場は女性が元々多い上に医師にも女性の割合が急が増えているためか、環境を改善するよりも現在の環境に適應できる人をふるいにかけている面がまだ強く感じられます。その表れの1つがああのアドバイスだったのではないのでしょうか。

女性医師の割合は2020年時点で22.8%、29歳以下では36.3%と急激な増加傾向にあります。結果として働きやすい科に人が偏ったり、逆に、女性の少ない科に挑戦する人が増えたりすると思います。特にこれから進路を決める研修医のためにも、不安を共有したり相談したりする場があることが望ましいです。また、困難の多くは自分がその状況に置かれてみないとわからないものも多く、これまでの苦労など他者の経験談も重要です。そういった情報を共有し、現状の改善を検討する場としてこのミモザレーターや女性医師支援センターが機能してほしいと思います。そして、より多くの女性が、女性であることを理由にやりたいことを諦めなくてもいいような病院に、さらに、いずれは働き方の改善をリードする医療界になってほしいと思います。

ミモザルーム ぜひご利用ください！

業務の合間の
一休みに…



自己学習に…

パソコン、プリンター等あります

<担当窓口>

事務部職員課：内線2121・mail：koshoku@dokkyomed.ac.jp